

北海道地震津波の記録

「海が吠えた日」より

悔恨の南海地震津波

大牟岐田 故 宮崎一誠

昭和二十一年まで私の家は「坊小路」の観音寺川の左岸添い、日の出橋より北側三十メートルぐらいの所にあつて、祖母と母と叔母に私たち兄弟妹五人の八人で暮していました。

津波の前日、兄は四国電力牟岐変電所の夜間勤務で不在のため、私一人が二階で、他の家族は一階で床にきましたが、この夜は十二月にしてはなぜか暖かかったような記憶があります。

翌二十一日早朝まだ暗闇の中、突然今までに経験したことのない激しい大地震に眠りを破られ飛び起きました。この時階下から「揺れが止むまで怪我せのように蒲団を被つとれよ」と祖母の声が聞えたので、また蒲団にもぐり込みました。

初めは横に揺れていたが、直ぐに上下振動に変わり、家は大きく軋り（す

れ合う）、神棚や箆笥の上にあつたものがバラバラと落ち、天井から下った電灯が揺れて音をたてていました。この上下振動はどのくらいの時間か分かりませんが、しばらくの間続きかなり長かったように思います。

地震が止むと、私はすぐに服を着て階下に降りましたが、雨戸が閉つており、外の様子は分かりませんが、騒がしい物音は聞えず静かなようでした。

まもなく母や祖母が妹や弟たちに服を着せ終わり、皆玄関口の部屋に集まりました。玄関口の板間には収穫し乾燥を終えたばかりの籾を吠に入れ並べ置かれていました。このころは食糧難の時代であり、「これを二階に上げていて逃げよう」、と母と祖母が言っている時に、外から雨戸を叩いて「津波が来るぞ、はよう逃げえよ！」と宮崎の伯母の声が聞こえて、足早に走り去って行きました。後日伯母より東会堂前の道路付近で、腰近くまで波につかって必死で逃げたと聞きました。

津波が間近に迫っているのも知らず、「子供らは先に逃げとれ。」と母に言われ、私が先頭に立って入口に行き、障子を開けた途端にドーン、ザーという音と共に、雨戸と雨戸の間から一斉に海水が吹き出してきました。「みなはよう二階に上がれ！」と言う祖母の声に、母は手をかけていた籾の一杯詰った吠を持って一気に階段をかけ上り、続いてみんなが二階にかけ上りました。

いつの間に用意したのか母がローソクに火を点しており、その灯りがみんな